

古河志

中ノ下

特別

リ5

15773

4

15

15773

4

古河志 卷之中 坤

○下大野村 以下属岡郷

藤浪氏藏



世村を概ノ旨といひて中若まてハ隆倉より奥ノ
の陣移りて弦陣へ出奥へ遊々その乃筋ハ西定
すわ東の方もある今乃乃なる

一 寺中塚といひて金剛院といふ修験の所住なる坊
舎の宵々塚あり隆倉より奥乃乃境まで惣寺中
ある塚のそ一ツは寺村氏

浄土宗 弘經寺末

龍溪山寺持院

西定寺

此寺ハモ也後因派也昔ハ降^セち^サ山後因派西
三派あり後因ハ關東より持阿并基の寺三ヶ寺
之^レを收^メ後因派ありて後因一派と云^ハり持
阿の宗^ハ々^ハ當^リと云^ハ導^キち又秩父より寺あり
由永保年中の記派あり^ト云^ハり

一鐘樓 鐘銘畧 下總國葛飾郡大野郷正定寺者
真宗開東三流之其一持阿上人所開基而丈一領
学徒高仰玄風蓮^ニ比^シ檐法品滿堂然中世兵賊毀
伽藍奪寺鐘室鐘亦失矣或傳泮侶惜^ミ之埋^メ井中矣
予久住此寺屢尋^ヒ而不得之遂募^シ衆檀一呼于應新

鑄花鐘永施無窮所冀者顯^キ便^ニ聞^ク鐘聲者念佛名冥
又名聲相俱超^ス越十方天上地下眠覺苦脫因而撞
之唯書佛號畧^下

時元祿元年歲宿戊辰初冬中三日

下總國葛飾郡上幸嶋莊下大野村證誠山正定寺
四拾二住中興誠蓮社證譽標水宗哲

一寺記畧曰人王八十九代龜山院御宇武州先王郡
猪俣黨旗頭藤田小三郎太夫行安之孫小太郎刑
部行重子釋良心字持阿^{持阿上人ト云熊野權現}
野鎮守弘安六八月詣相州善導寺初遇良弁始同^ニ
十^リ

宗義同年十月上洛云々

一本尊安阿彌作御長貳尺五寸

是ハ新田徳川三郎
義季ノ守本尊ナリ

縁起
有之

當今の本尊ハ彩田の孫院若の布言ハ内佛也敦盛
の念持仏妻日万行の作也敦盛の孤傳を九といふ
谷ノ法然の才子とあり熊谷蓮生と同つて其孫
才子持阿上人也

一玉莊空顔隣清居士

壽永三年二月

敦盛

位牌安置

寶物

一繩敷天満宮御影一軸

錦襦表具

後田ハ敦盛氏の子也敦神の自画といふ

一中將姫をとりし人なり

一軸

地ハ敦盛名字王一黒ハ髪
の毛藏まをたりといふ

一弘法大師六字名號

一軸

一元禄年中公のち社を新しむるに於たり

下銘は着飾る古河原大野村に定むるに因持阿

上人の言著淨土宗開基ニテ流義といふ一なる所存

三万六拾年餘る古河に在りて其後拾四代天養安住

隆通仕る年以來檀林弘傳仕る

一劫拾年以來と云々有りたる所也其元漸く及嘉徳初

隆末より敦盛に上ハるる所也其後弘傳有末なり

作月

一 古領言合三石之終又元和元年辰十一月廿九日伊奈

佐奈古及里月元下等 多常村之内に被下也
物より元あり

一 三ヶ年一度宛年終所礼中上寺あり

一 境内東方万四拾六百南方万八拾七百西方万六拾六

百北方三百七拾六

有通所遠多所産野

元禄八年亥三月七日

一 寶曆十三年未の夏領至方に所書付

尚古開山持所上人 正和三年以来古誦所建所

一 等持院之義は是利寺氏將軍の御法名に中々尚古上

人惠親上人等氏將軍の由緒より付院号より書

一 古領言合三石元和二年十月廿九日伊奈佐奈古殿所

里平證文以下並 大猷院所寺本所取之節

正定寺無任所寺平寺等所寺 左憲院所

所代所寺平所取之節所寺平所取之節伊奈寺

寺及増上寺傳由院三ヶ年より所係所寺下寺社

所寺所寺多所取之節及所出所寺所書所寺下寺

所寺所寺同所寺所寺 所寺所寺所寺所寺

所寺 所寺所寺所寺所寺 三ヶ年一度宛所寺

事

一 土井大炊頭孫古河御殿より節古河御殿より下
 大野村正定古河御殿より下 御付位持より後ハ高峯
 上人御付位持より下 御付位持より下 御付位持より下
 高峯上人古河御殿より下 御付位持より下 御付位持より下
 正定古河御殿より下 御付位持より下 御付位持より下
 古河正定古河御殿より下 御付位持より下 御付位持より下
 一 土井大炊頭孫古河御殿より下 御付位持より下 御付位持より下
 正定古河御殿より下 御付位持より下 御付位持より下
 高峯上人古河御殿より下 御付位持より下 御付位持より下
 大野村正定古河御殿より下 御付位持より下 御付位持より下

正定古河御殿より下

一 宮殿御建より下 御付位持より下 御付位持より下
 一 寶地院殿御建より下 御付位持より下 御付位持より下
 一 高峯上人古河御殿より下 御付位持より下 御付位持より下
 一 大野村正定古河御殿より下 御付位持より下 御付位持より下

内外とも黒漆金活玉
 金箔金二三の市銀銀
 銀の目紋



○大堤村

曹洞派

禪宗 戒あり
永平寺末

正源山

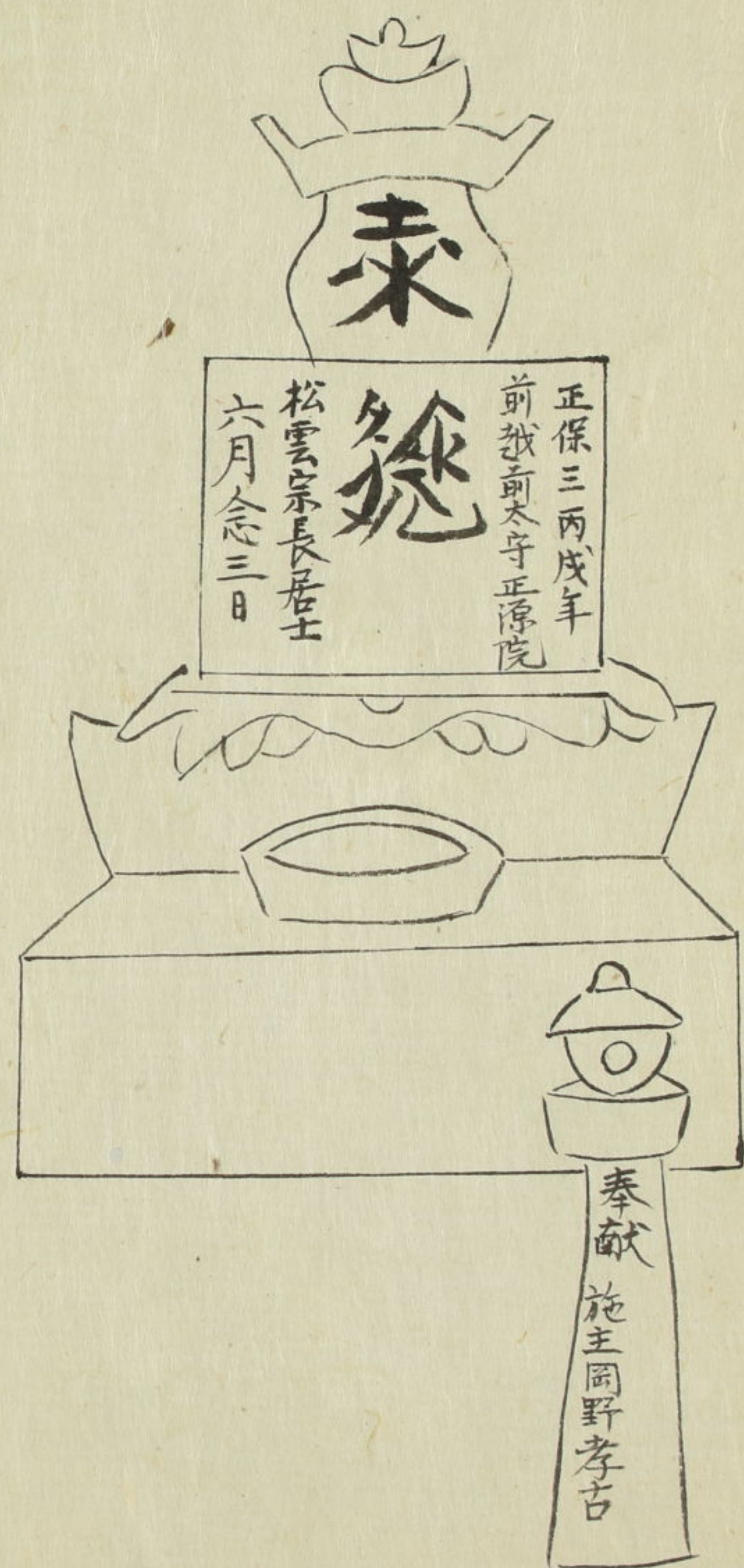
一 魁延寺

此寺他も魁延城ありをまうせ路ふ屋敷に也没
後其家長方を建てるといふ

一 鐘樓 鐘銘畧

東路總之下川葛飾郡下河邊莊古河郷大堤村正

源山魁延禪寺者佐々木苗裔魁延越前守秀綱公
遷得於此不料永平十四世祖鉄面癡想禪師之靈
塲也萬照高國禪師次之住矣为其濫觴也唯有似
草屋畧聊爾命工而諸堂悉畧延寶八歲次庚申閏
仲秋日前往永平當寺四世了然周得謹誌焉
一 魁延城前墓あり圖于左



一武家盛衰記卷五十一 万五千五百石 難延越前守 畧越
前守ハ古井殿下 此石出少石を納ふ 渠ハ智徳俊

仁義を重むる勇士故に穴上を浪人志たれど其家人
其不尼放之會外人と成りても君を慕ひたまふんと
甘地と名する人あれど魅地の家人等が心底を感得
其名知る知りを石宛十人の子とて我身と家人たふ
へ一日元日あり年月を送る野子孫とても無任と
一生不入房終子病歿す又其母家人等一書を建て
一魅地と名し一其書提を吊ひたる

一古事記縁を案するに世の人十五人志す一々未だ其
面々西保三年六月廿二日越前病死嗣子無き通る所
之の家来十五人同年七月十日卒集之に在り

家の紋
丸の内
四角結

あり才今世家僅に数氏跡以て秀綱父に宣綱年
ありて嫡氏孝子継延を譲り一母に出入りありあ
るをともきけりて庄内義氏継延へ人数を召向
ありしに家中和熟を以て防ぎ無父子に仙北へ退り
城あり二軍ありて無きに在りて皆育後を以て其
控を置るを庄内より守り引取れ定強氏孝に仙北
の関口よりふまをきしに庄内より使者を以て和議
て継延へ消息をいへりしに庄内家中より金ふ
存家上を是れたしを召向るを以て庄内へ一味し
先づをのりしにありしに自らの力を以て反

返せしに存外に城を以て使者を以てたしを以て
庄内より仙北屋敷山野寺に使者あり来る定強
父子は其兄城加へ継延へ消息をいへりて依り山野
寺に居る父子を継延へ消息をいへりて父子とも
死せしに名跡を以て庄内より城代をきしに
城あり十二軍ありて継延原四郎より庄内より小姓を以て
より庄内より廿一軍の防義氏思ふに継延の家上
庄内より使者ありて庄内より使者ありて庄内より
使者ありて庄内より使者ありて庄内より使者あり
源如長を継延へ入部し置るを以て庄内より

さうり是北馬尼^ルと云ふ人から序典膳
（じくやま^ル）^ルと云ふ人から序典膳
実上家中の^ルと云ふ人から序典膳
^ルと云ふ人から序典膳

一 小宮山氏云義光記ニ難延ノ領主佐々木典膳ト
云フ兼山ニ在城メ御下知ニ不随庄内ノ悪屋形
滅亡ノ後降参ニ難延ヲ返メ難延越前守ト号シ
一万千五百石右新庄ノ真室ニテ領ス

一 藩籍藩最上家後嗣^ルと云ふ人から序典膳
^ルと云ふ人から序典膳

信子年^ルと云ふ人から序典膳
合^ルと云ふ人から序典膳
あるを^ルと云ふ人から序典膳
沙汰を^ルと云ふ人から序典膳
世事を^ルと云ふ人から序典膳
源正米津^ルと云ふ人から序典膳
の老九人^ルと云ふ人から序典膳
世を^ルと云ふ人から序典膳
方の^ルと云ふ人から序典膳
後人^ルと云ふ人から序典膳

いそ羅のあゝいそ羅なる所て人々を治るに速く
の略を爲て還るべしとてやける野又一役
は初め津島内使として下向し時越延城あり
之を鎮むひそくは許し一は源を以て後ハ天性を
リしめて方々を煩へしれは家越へて急をあらけ
故出羽守義光の子とて鎮る所山越守吉重の吉重
一人なり義光の意功忘れしを略をさる人ハ彼
義光を以てあつてらるつるやれしやれしは
田来津を以て云々其後又義光の煩へ
くは義光の意功忘れしを略をさる人ハ彼

一 許我志云慶長五年上杉景勝石田三成ニ黨し使
ヲ最上義光ニ遣ハメ共ニ 東照君ヲ伐千奉
ラント計リし時義光群臣ヲ集テ上杉家ニ從ハ
ンカ又ハ 徳川氏ニ属セシカト評議區々ニメ
決セサル時越前守申ケルハ上杉家ハ謙信ノ家
督ヲ継キ古老勇將餘多アリ東國才ニノ大名也
徳川殿ニ敵セント思ヒ企ツナラハ東國ノ大名
ニモ一味ノ輩多カルヘシ又此節景勝カ兵ヲ諸
國へ出セシ沙汰モナケレバ會津へ馳セ集ル大

勢ニテアラシ然ル処ニ小勢ヲ以テ不知案内ナ
ル敵城ヘノサミト働入ラハ能擒ニテアラシ願
ハクハ同意謀ニ与スヘシト御返答有テ此趣ヲ
徳川殿ヘ告知ラスヘシ左アラシ後ハ景勝怒リ
當國ヘ寄来ラン然ル時上ノ山長谷堂以下ノ城
々ヘ軍兵ヲ差籠ラレ日数ヲ送り防キナハ景勝
必ス偽テ和睦シ味方ノ油断ヲ討テ押寄テ合戦
セシコレ敵兵ヲ國中ヘ偽リ引入テノヲナシハ
危キヲ有マシ敵ハ遠ノ長途ヲ經テ来レハ兵
糧モ自在ナラス人馬モ疲レシ其上ハ敵ノ模様

ニ依テ種々宜キ計リヲ有ヘシト諫ケレハ義光
之ニ從ヘリト關東古戦録ニ出野余嘗テ甞延秀
庵ト云町醫師ニ逢ヘリ同姓ナルニ因テ越前守
事ヲ尋シニ彼レ曰吾ハ越前守才ノ家也寛永中
土井利勝公ノ推挙ニ因テ江戸ノ大府ニ召シ
出サルヘキニ極リシヲ適々病テ没セリ是ニ於
テ吾家再ヒ興ラス云々

高サ
共
三尺
五寸程

石玉垣コレヲ圍ムニ基並テ
内ニアリ石柱ニ草加定環
和助鳩エトアリ

熊澤息游軒伯継之墓

墓高サ共ニ八寸程

息游軒妻矢部氏之墓

一岩淵夜話云一説ニ公未タ參州一國ノ御時ヨリ
ノ御家臣ニ熊澤平三郎ト云者有リ元來後奈良
院菊亭御所親王良純ニ三代ノ後胤タルカ御方
ケ原ニテ信長公ヨリノ加勢平手甚三郎ト共ニ

平三郎嫡男半右衛門儀忠節他ニ異成者ノ子ナ
レバトテ公御尋サセ被成シカトモ其頃國ヲ
立退北國柴田修理ニ仕ヘテ居タリシヲ討死ノ
凡聞有之テ偕止又公聞石存命ナラハ可取立
物ヲト御惜ミ被成シト也柴田崩レテ彼熊澤ハ
正則ニ仕フ正則身体召上ラレ川中嶋へ被遣テ
後半右工門ハ水戸殿ニ仕テ中比正則方ニ在リ
故終始委ク知ルトノ物語也世ニ名高キ熊澤了
海俗名次郎ハト云備前少將ノ臣ハ半右工門カ孫也
一楓軒翁云息游軒父ニ熊澤半右衛門ト云名府ト云

郡守新林前守又羅山先生の筆牒記に熊澤耶
蘇同祖の志の由記し、其れを熊沢の罪を以て事
其故を以て或出を以て子蘭社乃其れを以て出
多しと云ふ

一 彰信翁云熊澤の世系は安貞孫とて故に唐人と
あり、今池田山陽翁は彰信翁の末子とて初光
熊澤の末子とあり、今以て彼家熊沢の子孫たる
故有る武志と多くして其れを其れの家系とて熊沢
系と記す、由も多し

一行狀 先生成童仕備陽風操不群他日中川山城

守問先生為人於備陽侯侯曰熊澤少年侍予傍嚴
肅異于他兒輩備陽侯用先生大行仁政於國始臣
庶皆不信後圖國化而民悅其治休也文和武備君
仁臣直先義後得民厚分不欺文和者孝悌忠信之
謂武備者食足信足之美兵也非暴虎馘河甫殺
之謂於是備侯之治為天下壯觀似勝文公用孟
子之化士約不虐民不詐賈備侯置諫筵今猶有田
公羽對經書匹夫行孝悌之遺風孝子傳載源光政賞
孝民之兼應甲午歲備之前中二州大飢今歲秋七
事蹟
郡六早八月郡四洪水溢城下民窘迫者凡九百
人備侯及國老不知計所出乃委先生
先生行惠政民大賑備侯命先生疾苦故不訪貧窮之
虛實依之民得速蘇生備州之群士有胥譏者謂不
審之民欺先生而混因之先生不弁其虛實大贊國

財先生之不明也識者論之曰不然他國之惠恤也
計財之多寡責民之實否故惠恤不全先生之治也
數者一二而瞻者八九夫漢高祖霸不訪陳平之金
況王道之澤何校犯逆哉是乃君子之力量耳
先生在備陽修堤池蓄瘠磽上下豐饒備戾攝學校
于國先生及第與焉上古履中帝置史文武帝設校
天子擬闕志學校專願所諸國亦有庠序自佛寺盛而
飾登元亨應仁之時天子不聞學校士民不知王道
廢其後備陽之學校真言與濃州先生講非特文字耳射御
樂並講習之則教風最好矣先生講之才八右衛門子右
儒生藝師令教冠歲以下之少者為學校監護司乃延
先生遷明石其居隣天山寺始僧徒雖忌怨後遂服
從其德先生之子將寺邊僧等雖殺禁之境內不拒
之且言誰謂先生為佛歟哉

先生排佛只依公正無妬猜爭角之意情故雖浮屠
氏志直識明之輩者崇親先生者多先生辭備陽歷
數年後備戾制僧尼之濫停寺院之奢部內之僧念
戾他邦傳聞者歸罪於先生物部守屋中臣勝海三
未惑仙既一千年間雖有三善清行菅原文時等之
忠諫朝廷不用之遂雖菅江清日野之儒家至阿附
之惑先生及備戾偶見異人之剛直天下本朝道衰久
矣文武之士猶不知道矧婦女哉先生得藤樹之心
傳大弘此道女子志道者間有焉且樂師治工弓馬
藝士等聞先生之心法各得其技之妙者亦多本朝
之上古神道王教盛行矣中古以降陵夷今絕歌樂

兩藝可徵鑑古先生癸樂與道一之旨說雅正作神
道之誣妄傳會以明其道先生一日隱姓名吹越天
樂之笛安部飛驒守聽之曰此音非常人心情之正
癸音律飛驒守當時有名于樂先生字琵琶於小倉大納言實起卿第於藪大納言嗣孝卿
先生常癸源氏物談微旨中阮通茂卿屢歎得其蘊
先生為人威而不猛公侯望之肅然兒女侍之溫乎
坐語不倚卧不言食不語步行輿馬威儀不蕩動靜
言語一無躁妄不敢浮談飲食雖嗜物不饕餮過約代
不說遇家事大小吉凶不憂顏貌妻子奴婢不譴責
然合家嚴而和接人不倦雖秉教人無責辱先生聞

世之衰人之窮則痛戚如已有之或慰問先生寂寥
先生曰無暇日為善吾何寂寥之有或曰即今無為
善之事跡先生曰本心立于義則自梳自盥亦為善
也苟不立于義匡合諸侯只是徒閑先生四十有餘
歲厭體甚肥月夜說劍術卧不用蓐勸手足為輕爽
先生壯歲自字藤樹至易箒殆四十有餘年應事接
物視聽言動日新月熟貴朱王之學窮天下之理矯
陷格拘外之弊解書淫徒善之惑藤星窩院與王道德之實氣質變化之論水土時位之權藤樹創癸明
之一先生德恢弘之於是聖學大完且又世人以儒為一藝事公侯大夫士不知所以學依藤蕃兩師出以明人可日用之心法始知國家急務

然受備陽毀寺之誦遇古河上表之固蓋天降大任勞斯人之謂欣先生毀譽榮辱之間不苟動心韓文公乃与道斃而止識者以藤樹

比周濂溪以蕃山擬程伊川

編輯 集義和書

卷十六

集義外書

卷十三

大學小解

一卷

中庸小解

二卷

論語小集

八卷

廿四孝評

一卷

三輪物語

八卷

宇佐問答

二卷

夜會記

四卷

三神託解

一卷

神道大義

一卷

繫辭解

三卷

五倫書

一卷

大學或問

二卷

孝經小解

一卷

孝經外傳或問

五卷

女子訓

五卷

易解

師卦以下未全而設

源氏外傳

二卷

紫女物語

葬祭辨論

一卷

以上先生所著也其他假先生之名欲逞己說而竊梓之書多矣勿用和歌

寛文七末年所著とありて古河山ふりてなり
傳より

世をたぐひの山にさる人となりてしるれを那めいるを

おちし申めとし剛あう

はたへきてまを神代よりそらぬを人のあふりて若きもに
おちし元子祐あるかめあふるをいふなりてあふるのたふり
をそおのりよりあふるめをなままたぬを若きうらやましめ

そ中の梅を雪を雪も名あふるをいふをよめて

そそちを蔽ふあふ梅をえをかりしそ陽の半よりあふる

梅を若きうらやまし

そそ人のんよりし山にさる人となりてしるれを那めいるを

大和國桑田の里より伝ふ以豊はふ中川久良良

のうらへ木根の笛をうらやまし

あふるうらやましをたふる木よりしそ若きあふるを

南都氷室の露をうらやまし

笛のうらやましよりしそ神代の子孫神代の神をうらやまし

思ひさるんさふむいふは何なりや神の代をうらやまし

戊辰の春返るをうらやまし

老のうらやましをうらやまし故よりまを待ててそのあふるをうらやまし

たとひ蘇武もあふるうらやましをうらやましをたふるを

そそ人のんよりし山にさる人となりてしるれを那めいるを

へあふる

者激其子 寬永十一年甲戌先生歲十有六始仕備
前侯是板倉內膳正京極主膳等之所薦十五年戊
寅先生歲廿歸退其官寓江州桐原前是肥州島原
賊起備前援兵
其一人也云 十八年辛巳八月適江西書院請受教
於藤樹先生藤樹先生固辭不許空歸矣冬十一月
再往江西寓邑人淵田氏之家而經日於是藤樹先
生感其志而始謁之得其志隨居江州教年其考野
尾君其才仲愛君号八右衛門
流憩野尾氏才
三人俱居此一子後嫁森川氏在備前二女嫁岡田
氏在江州三女嫁南條氏在備前
正保元乙酉備前侯依京極主膳再來以祿之于時

先生歲廿七備前國政大革先生俸祿
至三千石永應四年備
之前中二州大飢窘迫及九万人國老不知計為乃
委事於先生、、此命施政民大瞻尋修堤池蓄瘠
硯上下得所安遂設庠序之教其舉皆出先生及其
家弟與焉上世履中之朝置史文武帝設校以降列
國皆有庠序中興廢之為國分寺云
制減佛寺壞淫祠上世物部守屋中世勝海三輪逆
原文時等所表遂不行皇朝且時勢慶安己丑先生
如是况較近列國有此舉可謂盛矣
歲卅一從侯於東武侯伯大夫士大欣慕其道不可
勝數 猷廟聞而寵之侯伯之稱門才子者紀伴大
納言賴宣卿大小路伊豆守信綱板倉周防守重宗

久世大和守廣之板倉內膳正重矩松平日向守信
之堀田筑後守正俊板倉內膳正重道松平備前守
、淺野因幡守長治中川山城守久清松平備後
守恒元織田內匠頭信房久世三四郎廣邊板倉市
正重元荒尾平八、水野周防守忠增本多下總
守忠泰松平若狹守直明等云明曆五年丁酉先生
歲卅九繇病辭備前居京洛前是先生狩轉山中手
足傷故辭武事也備前侯令其季子池田輝祿為先
生之後自是先生更名稱了介居京師學雅樂習國
典一日微服吹笛有安倍飛騨守聽之曰不常人其

心情之正即發音聲云先生所學出小倉大納言実
起卿教大納言嗣孝卿云先生嘗發揮紫女物語得
其微旨後傳中院通茂卿洛之公卿大夫顧事先生
者一條右大臣教輔公久我右大臣廣通公油小路
大納言隆貞卿中御門大納言資照卿伏原三位宣
幸卿中院宰相通躬卿野宮中納言定縁卿野宮中
將定基卿清水谷大納言実業卿押小路三位公起
卿久世中納言定清卿諸君云寛文丁未先生歲四
十九京尹某信誣逐先生、道居城州鹿脊山已
酉先生歲五十一播州明石侯松平日向守受縣官

之命待先生於其封內於是居明石太山寺之側名其軒曰息游門人遂稱之延寶己未從_テ後和州矢田同州郡山_ノ炭本多下野守寅敬先生不減於矢田炭貞享四年丁卯又從_テ後德州古河冬十月上表演政事忤旨乃禁錮_セ元祿四年辛未秋八月殞古河壽七十有三_{正室矢部氏者元祿元年八月廿二日先殞}共買其地邑大隈_{難延寺之土以儒礼葬之謚以蕃山先生先生之在備前以食邑蕃山故為謚字也}先生生四男七女其所出矢部氏也一女原二女載各適播州人伯某字右七郎氏蕃山仕備前炭仲某字左七郎氏野尻仕

明石炭三女留適江州人四女咲適備前人五女房適江州人叔某字武三郎仕本多下野守季某字左四郎仕明石炭六女後適播州人七女某也

會喪門人中根次常巨勢直幹北小路石見松平隱山山本廣足從者野田勘左衛門

友人問余曰熊澤先生事跡未審請_テ吾子訂之曰先生之處世始在山陽而後遊畿內遂謫_ニ于關左所_ニ在門人不_レ一唯從其簡要也天明丁未請_上梓余不肖僅辱先生之外裔豈得無望乎暫任其請雖然先生觸_ル昔之人也狀之行於世亦懼_ル炭先生之意草加環

謹跋

一許我志畧曰巨勢卓幹力識セル実録不文事未夕
盡サ、ルカ如クナレ凡卓幹ハ三輪ノ祝人ニシ
テ即千蕃山ノ門人トモ聞エシカハ必シモ杜撰
モ有ヘカラス畧又予近來草加宇右衛門ナル者
ヲ知レリ今ハ御先手与力ナレ凡岡山ノ臣ニノ
蕃山ノ女此家ニ嫁シ乃千字右工門ハ蕃山ノ外
孫也畧天明中熊澤先生ノ行状ヲ書キ板ニ鏤セ
リ板ハ即千難延寺ニ贈レリ畧

○小堤村

一里老いそく世古より古河ニ属し一たひ
一村のち古河ニ海と二給子といふく野田組
篠田組と号し多量に今村長ニ家あり
一又云城跡と云傳へたるハ多量に三所祇南字
古河山といふ所の西ノ堀の内に農家あり地多量
飯沼といふ人ハ多量に城跡といふ
傳ふ又多量に地多量に蒲冠名に地多量に
と云といふつたふ

一東鑑志太義廣と小山云治永五年閏二月己巳畧中

足利七郎有綱同嫡男佐野太郎基綱四男阿曾沼
四郎廣綱五男木村五郎信綱及大田小權守行朝
等合陣于小手差小堤處之合戰此外八田武者所
知家下妻四郎清氏小野寺太郎道綱小栗十郎重
成宇都宮信房鎌田七郎為成湊河莊司太郎景澄
等加朝政蒲冠者範賴同所被馳未_中今聞義廣之
計謀思忠輕命之故臨戰場來勝矣<sub>此不より寺里殿屋
左より関宿飲子小
手差云々</sub>

新義志云云<sub>山城石碓山
松橋寺是寺末</sub>

宝林山地藏院小治坊

圓満寺

- 一 除地因烟古傾拾石 此除地以附小時代施之此處
不取糸從從吉郎年不入と傳小古記是
- 一 本号 服部 地藏菩薩 行基作と傳
- 一 兩界曼荼羅 曼荼羅 繪師 西村等 古記是
- 一 開基人 皇武格一代平城天皇御宇大同四己丑記弘法
大師奧州湯殿山御參詣之時創於此寺大師御持
束之鈴五銚三銚獨銚有之中古及于炎燒其餘之
宝物亡失之法流中興大永元辛巳季行崇々己

前之事故不録于此而已 行杲行宥行秀行恩行
祐行慶俊杲行空性盛行譽行鏝宥尊行真行意実
行代々名如斯以上別紙寺記

一 後山子墓あり石面如左

升

大曼荼羅施主諏訪三河守息女
小堤大母妙盛大姊
大永六丙戌年六月 本願四満寺住
法印俊恵

禁制

- 一 堂舎佛閣狼藉之事
 - 一 於山内殺生仕る事
 - 一 於山内墜跑うちやる事
 - 一 僧尼と俗人並に通りわけの仁あるい無き門内は猥に
出入
 - 一 門内より山内へ出る仕る事
- 天明二年寅月 市新形
- 寺より通り板に事して門上子掲げしを是とあら
たえて近新形あり佐竹といはる時松よりあり
たりといふ

○開戸村

一里俗云古澤素より其の街なりと関の郡の村の西方
上多^{カミ}石村^{イシムラ}へ出る坂の上なりと傳へるなりとせ

淨土宗

同本下寺地所
西宮寺末

三郎山瑞多院

了常寺

一除地三石五斗を升

古河城主永井信清殿が除

此寺下

一開山性照上人

一大檀那源素堂殿が所^所源基氏公法名瑞泉寺殿

玉岩町公大居士

一當時建立を性光庵院所^所延文三戌戌年(己月)

當年と三百五拾年(己月)に成る

一客殿佛阿彌陀如来像

寺内作

此の基氏公の寺本寺に所^所約に年号月日の意教

書付あり

一弥陀如来像一幅

寺内作

此の関戸町野
寺に本寺と云

一地藏菩薩像一幅

瑞慶寺に本寺

と云

一古向弥陀如来像一軸

寺内作

一茶師如来三像

延文
丑九

慈光大師作

一 本堂并、庫裏方丈新建立 中興忍峯某

正徳五己未年九月

うきうき十五世住

忍峯信阿以上

一 此寺主人まゝに土階とも熊谷蓮性の住持といへ
とも此外より中より記録あらはれず、然るに

○下邊見村

弘法水

此流は幅三万坪の山渠也、流せる橋を思案橋といふ
中田常光より中より示 寶曆十二年のうらとよ何
方ともなく、旅僧の来り、此水の名を尋るる、病ある

系念商云
此所の山
時刻なり
一を記す
弘法大師
とす、此水
水たつと
のより、
とす

名流ある、ちうハ、之、水、之、病、病、由、へ、といひて去
り行方、知らる、也、それより、詮、ふ、と、なく、彼、僧、を
弘法大師、現れ、き、て、教、へ、る、と、を、方、の、人、も、信、ず、や、う
く、其、上、洛、する、名、教、を、一、ら、せ、て、あ、ら、た、は、旅、亭、を、
元、立、た、せ、其、洛、志、う、い、き、もの、此、の、名、は、年、た、る、手
拭、を、ひ、く、病、を、癒、す、或、ハ、休、閑、は、あ、を、入、道、て、石、室、の
外、方、で、も、持、ち、く、金、秋、の、日、を、ち、か、く、念、仏、を、唱、へ、由
き、う、あ、の、ひ、を、も、き、う、ハ、大、願、成就、の、機、い、く、ら、とい
ふ、と、な、く、あ、る、月、に、立、并、へ、たり、し、は、後、を、な、く、た、り
ありとい

一許我志云彥根、儒者野子賤力藁荷園集二弘法
水辨贈友人曰今年下毛野地有弘法水出洗疾輒
愈伸偃起甕焚香披輦種、奇効轉相流聞東都及
近帶諸州之民往洗者日數十人遠方之民不能造
者託人汲致升斗如受上池甘露或至漬以布帛曝
乾傳之以按疾痛庶幾有効問其始曰土人或於此
水洗糞畱一浮屠來見曰此水昔弘法大師之所鑿
所愈衆病者焉汝何污為言畢忽不見好事者試就
洗病者果有効焉由是其聲隆、然起號曰弘法水
云在昔唐敬宗室曆中亳州浮屠詭言水可愈疾號

曰聖水住汲者日數百人變度曰妖由人與水不自
作命所在禁塞李德裕亦言昔吳有聖水宋齊有聖
火皆本妖祥古人所禁請下觀察使令狐楚填塞以
絕妄源善哉二公之舉也夫疾病者人之所最患苦
故苟有曰能治焉者民情使爭趨之不暇問其真偽
民之無知何所不至一大吠形百大吠聲奉財損貨
破家弗顧昔在漢李張修張角之徒皆唱妖術聚衆
為寇天下響應遂至朝廷力不能制者其始皆起於
療疾焉誑誘之術唯為最妙治國家者可不畏哉故
先王之法有造言亂民之刑訛言惑衆者殺無赦詩

曰民之訛言亦孔之將若弘法水者眞亟禁塞スルヲ先如斐
李二公之言耳余友人得弘法水用療病者於是
爲二公之事以解其惑ワツカ一歲ニノ次才ニ衰
ハ遂ニ依然タル本ノ小泥渠也ト子賤以テ故祥
トノ是ヲ駁ス誠ニ當レリ

○武藏國埼玉郡太田庄以下属河邊郷

一武藏國和名鈔牟佐之延喜式訓曰諸國名義考
武藏の書ヲ大國トあり
畧曰武藏の名義いす、考は武縣居大人身狹上
對ひたる牟狹下シモちうといふれつれと諾ちらぬ

と云々古事記傳子牟邪志國今邪サ清スミて唱ナゲれと
濁ナゲるナゲ此邪サ字マ藏サの字萬葉集十四子牟射
志野シノと書カキ流射サ字マいづれも濁ナゲるナゲ子用ヨウるル係ケイじ名
義イいイ思オモはたハタとあり立入信友云國造本記子
无邪志國造乃次子胸刺國造とあるもをち地名
とせえたり狗利身利とこの古事子よれり地名
ぢらうといひり續日本紀稱徳天皇神護景雲二年
六月癸巳武藏國獻白雉云々奏曰雉者斯良臣一
心忠貞之應白色乃聖朝重光照臨之符國號武藏
既哉武崇文之祥云々とあるハもと牟邪志の三字

寺記並通

武州埼玉郡真光院未由記

真光院創草之初不可_署中興主後土御門院御
宇文明初有万慶和上世姓大將軍足利君之裔_署
辛亥之夏五月晦日有變火庚寅四月天雨雪兩雹
有災倍于前慶師懇念不捨_祀富士淺間廟殃災
迺止矣自爾以來至慶長之際有寺主賢照道業不
讓于師庚子君夫人疾而病諸臣_{鴻野修理}驚歎請
救於照閣梨誓修法三日四儀持咒病尋愈君王感
喜更給壤田若干以契附寺_{一書以穀米若干永給}
_{淺間廟今日黑印}

一淺間社ハ下總國葛飾郡伊賀袋村ニ在_署向古河
村密寺真光院者布金之創邈不可_署古未所錄缺
焉河之向曰總之伊賀袋村_署
一又一通如左

寺寄附

一富士淺間 并宮免

一伊黑印 金帛

一聖觀音像 行基作

_{師長四尺寺}

一御殿 一棟

此寺号ハ山王系
氏古阿彌とい
時子あり

一石濯盥

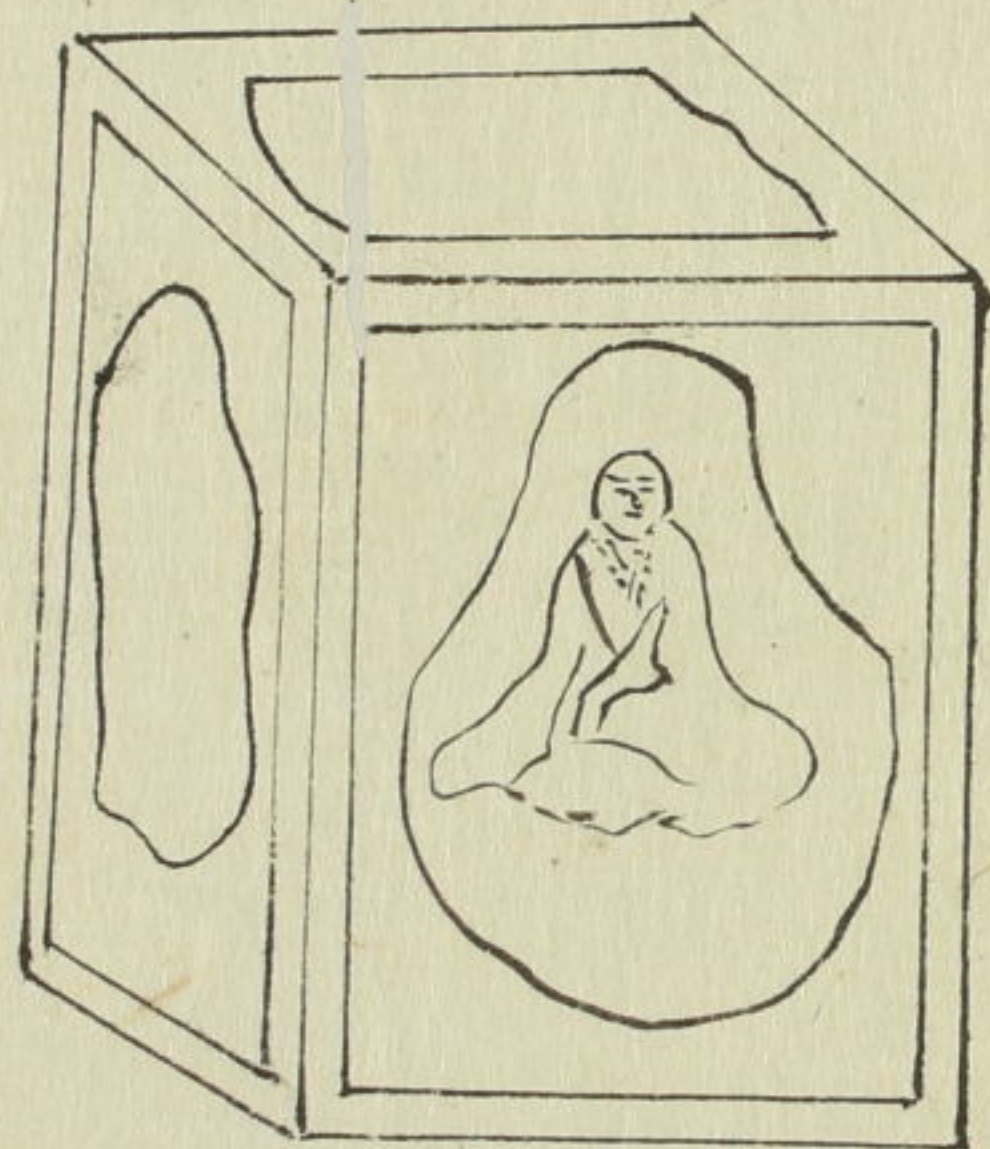
一基

以上

慶長五庚子二月日

一里松の傍あり本堂あり殿ハ是利公方の在り
ちを多ち成さる川一ありまゝなりと

一住僧云觀音をたふの麻の板を往昔渡り川へ
流れ事一木を揚ぐ造り一何の木といふを志
らひし観音をたふを急をたふを盤を公方
よりのお附より彫りある仙像ハ素人乃作といひ
流たふ



高サ一尺五寸程
横サ一尺三寸

一庫裏庭あり根乃大木あり

二サ即天候

俗子ヘラ仙と云ふ石より一若
の墓印ハ多くかくあり



丁安七年

六月日

灰ある墳と見ゆれども絶く伝事ありといふ
 一 不動石といふ石は石像より古河公方よりあるを
 といふ

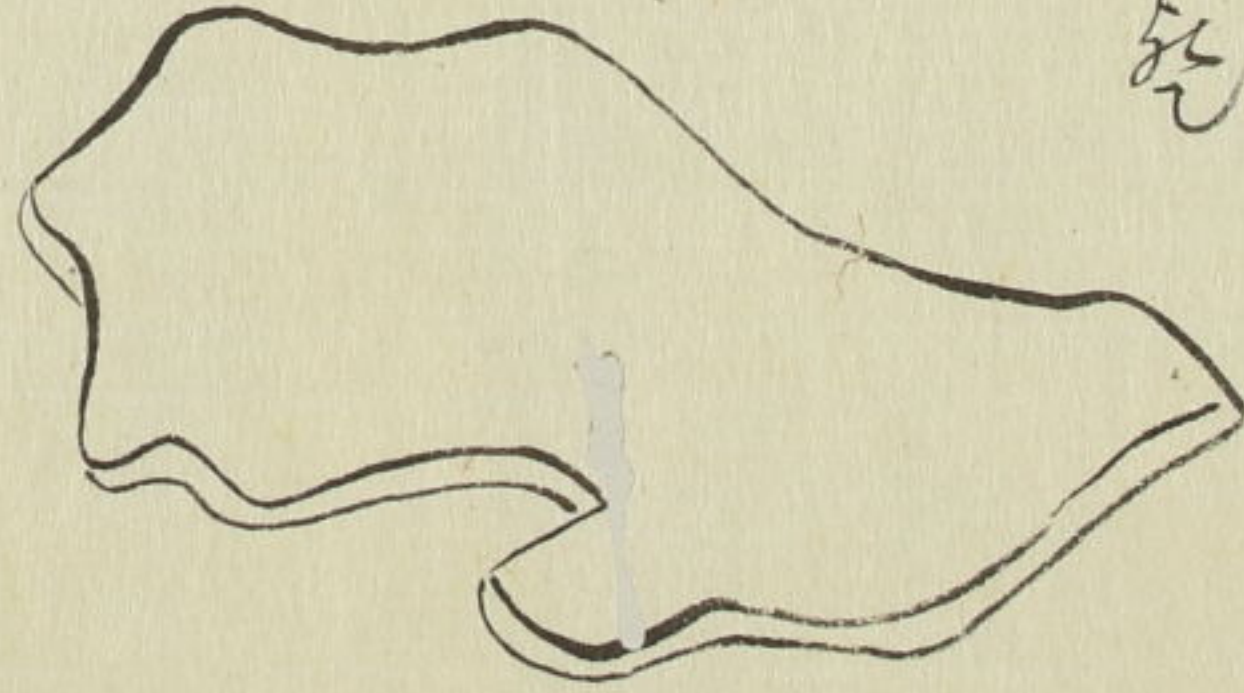
石質根府川の産物

平大石

横さし

一万餘七

ありん



一天満宮

一字

渡良瀬川
の岸にあり

伝記云我孫國埼玉郡向古河天神宮創建幾年
 といふことをあらたし人野元傳て曰古河所築城は始
 洪水堤をうかり功業後らるる費一築くるにぬるなり
 當時の城主正親善王神友重は故より野永く城の隈
 ちと一崇あまらんとて至り神護感應宮一からり
 して成就せしむ正親善王并て天神社を建立す野正
 親善王今此處古河境内にあまを本とて神のを示す木
 榎造り塔の形ありて古くよりあり

一天神中以額座一先古河古河主と并大炊以殿家中

古田とある所耐年意中再島寺天神本地十一面
観音也天子ハ若政天と号す

一 別記、武蔵葛飾向古所村に神宮、元禄十九丙
子孟春當為源朝臣朝議大夫松平氏何屋殿太
守家藏松田いた事、野天神社檀越殿法、野誠公
尚志、老古主法平、法平曰、お休、桑信、入施、修補、
一 連歌百歌一軸、入、
於向古所村に神社、為祈禱、松田いた事、お休
行

賦初何連歌

花の香もいほやと萬神の夜 吉眠

ことと里多あそふ松たろ文陰 お休

泉を穿る、静の初春、古所を 月形

うづゆる、うづゆる、おれ、おれ、おれ、おれ、 正負

一寸汐と飛と、くく、神の妻の月 正英

古のありはまや、おれ、おれ、おれ、おれ、 成子

めさめつ、いさけ、おれ、おれ、おれ、おれ、 好虎

ゆき、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、 吉矩

已下略す、一軸あり

芝安部、元禄十九丙、年富士山、曼草、連歌、廿六歌

大久保と書つゝ草乃涼しき上 戸神

ひらくあまのふ代のことのそ

月と移さふ神の詠うそ 徳嶺

云々で多れ、水と安んじら お祇

夏うは吹をくりたる秋乃風 月人

漸くさむき旅の都戸也 徳嶺

万姓 興右重の

一
はに競乃喬と云原三位が政仁宇治より將軍
の時自刃と偽り休ましく此をより遁身をそ

儘住まつきぬとも又三位のそを捕まて詔崎の
埋て将孫をとりとも墓をたかれどと折る
事と此をより任付たりともいふつれども競乃
末ちうと特き 血流しはよ移るえとといふ
競乃帯刀とく久く持傳へありともある時お孫
き凶事のそととく競乃を移し移るるを
のそとひし子孫をのりあやうつたをりたる帯刀の
そをりたるを移るる也秘物をば除厄とへといひ
因る帯とたすのそとくふ動するは勅使たりと云
或人云此乃あるの尻に子孫と他物と引くらぬとある
能刀と移りたりともいふるもせうや

略氏の花押



衣之度於馬子前渡過之水助
走四之條神妙之至状如件

天文三年十一月朔日

一彰信齋云官本分脉系列

品嵯峨天皇

融才十七皇子左大臣

昇

大納言

仕

武藏守

宛

箕田源三

綱

賴光臣弟等四天王其一
源二別當内舍人源二敦為子養育

久

源二原別當
鎮西松浦

安

澁口

從五位下

傳

澁口大夫
從五位下

昇

澁口

右馬允

競

澁口源七

馴

澁口

○柏戸村

相撲力士

柏戸村右衛門

許我志曰初ハ出井清次郎ト云村民出井新内十
ル者ノ才也幼ヨリ大漢多力好テ角觔ヲナス弱
冠ニメ郷里ニ及フ者ナシ宝曆中伊勢海五太夫
偶過テ之ヲ見其自カラ尋常ノ器ニ非ルヲ偉ト
メ請テ才子トナシ教ルニ其法ヲ以テスルニ愈
益励ミ技大ニ進ミ其徒ノ一二ニ居ル是ニ於テ

伊勢海命ノ柏戸村右衛門ト改メ称セシム天明
元年伊勢海没ス因テ是ヲ嗣テ伊勢海村右衛門
ト號シ寛政八年五月廿日五十九歳ニ没セリ
其伊勢海ヲ称スルニ當テ才子某ヲ柏戸勘太夫
ト名ノラシム勘太夫村右工門ニ先達テ没ス才
子某ヲメ柏戸宗五郎ト喚ハシム今存在スル是
十リ

一 此村右衛門出生の家々皆柏戸村の農民多リ村右衛門
初メ柏戸と名のり東方此大関とあり一より許家
志といつる如く家々より三代大関お鏡字五郎

角力、年寄と云々伊勢海はあらたに頂利助柏
戸を譲りしは後子利助を久政の末子といひ
東方の関は四世よりお鏡しある柏戸此名遂に
絶たてて惜るものなり

○柳生村

一 此村田子の切妻に徳数子あるを数族と号し
てたてあり此死夫等惣人の子知れりるに官とを
檢使さしむけり婚姻者子世も皆此一考ある
ち子に子に結ひ死夫より此お鏡あるに氏傳

よきておろそけにせしむるなり。其の一黨滅滅し、中記
寛政の初よりあり。且、後うき二之朝、強りて、一黨滅
て、文政の中よりとせしむるなり。其の名強りて
さくくともて、たゞ此一黨、邪法にけしき、一党
いふとも、強く方々たておろそけなるなり。其の
さくく、唐花にても、たゞ此一黨、邪法にけしき、
名目あるなり。邪黨の制、一黨、強りて、一黨
一黨、まぬれけるなり。その名、強りて、一黨
せしむるなり。其の名、強りて、一黨、強りて、一黨

2125

